哲學研究　第二百十一號

アリストテレスの感性論（完）

——アリストテレスに於ける哲學の概念、一——

西谷啓治

七

前節に記述した所によれば、或る類の感覺が成り立ち又その類に從屬する各種の感覺が相互に識別されるためには、その類の內包的構造聯關に於ける限界的契機としての「反對的なるもの」（例へば視覺に於ける白と黑）の「中」を中心として、感覺能力が感覺されるものからのlogos（比）を——そのlogosと對立するlogosを以て可能的に自らを限定することによつて、換言すれば自らを比例の中項の位置に置くことによつて——受取らねばならぬのであり、然もこの「中」は、潛勢より現勢への發展をいはゞ立體的に一貫する中心として、感覺能力の根源に繫るもの、或は根源的なる感覺能力の現れであつた。今や、この根源的なる感覺能力を開示すべき吾々の課題を果すために、吾々は觀察の地平を今迄よりは一層擴げることが必要である。

何となれば、今迄語られて來た限りでは、「中」は夫々異つた類の感覺、例へば觸覺・視覺

等に關するものであつた。然るに吾々は、同一類に屬する感覺のみならず、異つた類に屬する感覺をも區別し得る。而してこの事實が、吾々をして感能をその根柢から理解せしめる手懸りなのである。例へば、白いと甘いとを感じ分ける能力は何であるか。先づ、其等が感覺的なるものであり、然もその感別が判斷以前に既に感性の領域に於てなされる以上、感別の能力も感覺能力でなければならぬ。次に併し、それは離れ離れの能力、例へば一方では視覺他方では味覺、であつてもならない。白いと甘いとは、互に感じ分けられる限り、同一能力に於て、然も同時に、あるべきである。「兩者が互ひに異ると言ふ(λέγειν)ものは同じ一つのものでなければならぬ。そして、かく言ふものとしてさうである樣に、かく考へまた感ずるものとしてもさうである。[1] 離れ離れの能力によつて離れ離れのものを識別する(κρίνειν)といふことのあり得ないのは明かである。また離れ離れの時間のうちに於てでもない。……その同一能力は、相異るといふことを今、言ひ、そして今、相異ると言ふ。[2]……卽ち離れ離れでないものとして、離れ離れでない時間に於てである」(De an. Γ 2, 426b 20—30)。[3] 而して異つた類の感覺を識別し得る所の從つて感覺の全野に於て統一者の位置に立つ所の一つの能力は、根源的なる感能であり、多樣に分肢する感能の根源でなければならぬ。かかる

ものがかの「共通感覺」(ἡ κοινὴ αἴσθησις) と呼ばれるものの能力に外ならない。4)

註(1)及び(2)　感覺能力に就てそれが「考へまた感ずる」といはれ、「言ふ」然も「今言ふ」といはれることは、後に問題とされる如く、此の感性論の根本に關れる事柄と思ふ。

(3)　なほ De sensu 7, 448b 20 以下を參照。

(4)　「共通なるもの」(τὸ κοινόν) は、いはば平面的に見れば「共通的」であり乍ら、立體的に見れば「統一的」といふ意義をもつ。他の例を任意に擧げれば、Metaph. K 3 によれば、存在すると言はれる一切は、「存在である限りの存在」の或る樣態、その本來的な又は一時的な狀態、その運動等である故に、存在すると言はれる。即ち「或る一つのまた共通的なるもの(τὶ καὶ κοινόν)に從つて言はれ」(1061b 12)、「それに向つて還元される」(a 11)からである。――なほ例へばMetaph. I 8 をも參照。

かゝる根本的感能としての共通感能を明かにするために、先づ、かの異類的なる感覺の識別が如何なる仕方でなされるかを見やう。アリストテレスは彼が屢〻用ひる限界點の比喩を以てそれを說明してゐる。一つの線分の終點は、同時に、その線に接續する他の線分の出發點である。故に不可分なる一點が同時に二つに考へられ得る。(吾々は假りにそれが兩面をもつと言ひ表してよいであらう)。而して共通感覺もかくの如きものである。「恰も、一つの點と呼ばれるものが、一つにして又二つである限りに於てまた可分的でもある如くである。ところで、識別するものも、不可分的と見られる限り一つにして同時であるが、可分的と見られる限り一つではない。

といふのは、そのものは同じ點に同時に二度携はるからである。それが限界を二つと見てそれに携る限り、それは二つの離れ離れのものを、或る意味で離れ離れにされた能力を以て識別する。併しそれが限界を一つと見る限り、それは一つのものに、然も同時に、係る」(De an. Γ 2. 427a10)[1]。こゝから、共通感覺も一つの「中」であることは明かである。恰も一つの限界點が一點であり得るのは、一つの線分の終點乃至他の線分の出發點としてのいづれによつてでもなくして、その兩側面を自らの兩側面とする「中」によつてである如く、共通感覺も、例へば白と甘とを識別する限り一方では視覺の、他方では味覺の、能力と一つに結びついて居ながら、同時に、白と甘とを識別する限り、換言すれば共通感覺それ自身としては、そのいづれでもなく、寧ろ其等の「中」でなければならぬ。[2] かくして今や吾々の課題は、共通感覺に於けるこの二つの見地、卽ちそれが特殊感覺との結合に於て見られる見地とそれ自身として見られる見地とを考察することである。

註 (1) こゝに引用された言葉は、白と甘の如き異類的感覺の識別のみならず、白と黑の如き同類的感覺の識別をも含めて語られてゐる。

(2) この事は、後に述べる共通感能の他の機能、卽ちそれが感覺作用を感ずること、或はどの特殊感覺によつても知覺されない運動・空間的大さ、數等を知覺し得ること等からも明かである。

共通感覺と特殊感覺との結合に關して特に注意さるべきは、共通感覺が、感覺の領域に働く限り、恒に特殊感覺を通じて、或はそれと一つにのみ働くといふことである。それは五つの感覺と並立して色・音等と並んだ他の類のものに向つて働くのではない。たとへ、それが白と甘とを識別する限り、此等が共に同時にそれに於てあるとしても、然も白と甘とから一つの可感的性質が生ずるといふことはあり得ない。「その唯一能力は如何なる唯一のものに係るか。〔係らない〕。何となれば、白と甘とからは如何なる一も生じないから。故に psyche のうちには或る一つの能力があり、psyche はその能力によつて凡てのものを感覺するのであるが、然も各、異つた類の感覺は各、異つた〔特殊的〕感覺能力によつて感覺する」(De sensu 7, 449ᵃ8)。即ち共通感覺は「感覺する psyche」の、psyche としての、能力である。然もこの普遍的本質は、恒に特殊的感能と一つに(いはばそれの能力性として)のみ、個別的對象に向つて個別的感覺として實現されるのである。共通感能と特殊感能とのこの不可分離性は、「各、の感覺には、固有的働き方と共通的働き方が內屬する」(De somno 2, 455ᵃ13) といふ如き言葉にも現はれてゐる。同じことは、唯一能力が、存在論的に把捉さるべき本質に於ては種々に分たれるとも言はれる。「唯一つの感覺がある。そして主宰的感官も一つである。

然も感覺であることは、感覺されるものの各類に對應して相異なる」(ibid. 455ᵃ20)[1]。かくして、共通感能が「感覺する psyche、そのものの本質的能力であり、然も各〻の特殊感能が現實に感覺する psyche の本質的[2]有り方であるとすれば、唯一感能とは、特殊感能を夫々の根源に於て見たものといつてよい。

註 (1) なほ、De sensu 7, 449ᵃ16; De iuv. et senect. 1, 467ᵇ35 等にも同樣な言葉がある。

(2) この解釋に現はれた「本質性」の一見相反する如き二義は、「本質」といはれるものの二面或は寧ろ二つの契機と考へる。詳しくは實體論に於ける潛勢と現勢との敍述に讓る。

併しそれと同時に、共通感能は特殊感能のいづれでもない。寧ろ其等すべてを其等の根源に於て統一するものである。卽ち、特殊感能を夫々の根源に於て見たものは、同時にそれ自身としては、すべて特殊感能の「根源」(ἀρχή) である (De iuv. et senect. 2. 469ᵃ18)。それが屢〻「第一の、根本的感能」(τὸ πρώτων αἰσθητικόν) といはれ[1]、又感能の「主宰的なるもの」(τὸ κύριον) といはれるのもこの故であり同樣にまた「それによつて psyche が凡てのものを感覺する」(前出) とも言はれ得るのである。この事からして、それが「中」であることが一層進んで規定される。前節に於ては、各〻異つた感覺が「中」に成立つといはれた。然るに今や個々の感覺が根源的に見て同一能力によつて統一されてゐると

すれば、諸〻の「中」は實は一つの「中」に外ならぬ。上に、共通感能が特殊感能を通してしか働かぬと言つたのも、その唯一の「中」が各〻の特殊感覺の「中」となることを意味するであらう。而して、白と黑とが視覺に於ける「中」によつて識別される樣に、白と甘とも、恰も限界點の兩面の「中」に於て如く、或は相對する兩極をもつ多くの直線が出會ふ圓の中心に於ての如く、共通感覺の「中」に於て識別されるのであり、然もこの二つの場合の「中」は結局一つのものである。次の重要な個所は、その事を語るものと思はれる。

「感覺されるものの能動を受取る場合の視覺や聽覺の最後のもの（τὸ ἔσχατον）は一つであり、唯一の中なるもの（μία μεσότης）である。尤も中であることは多くであるが。psyche が甘と熱との相異を識別する能力は……一つであり、然も限界點の如き意味に於てである。そして甘の感覺と熱の感覺とが、類比的に又は數的に一つなるものとして、各〻それ自身に對する關係（甘の苦に對する或は熱の寒に對する關係）は、かの視覺・聽覺等が互ひに對してもつ如き關係と相如くものである。[1] 何となれば、同類でないものを如何に識別するかと問ふことと、白と黑の如き反對のものを如何に識別するかと問ふこととの間には、如何なる相異があらうか」（De an. Γ 7, 431ᵃ19）。

註(1)　此の句の本文が難讀なるために種々なる讀み方がなされてゐるが、こゝで假りに大體に於て A. Busse の獨逸譯によつた。

兎に角、アリストテレスがこの句によつて言はんとする所は、その次の句から解釋すべきかと思ふ。此の邊で彼が言はんと欲するのは、明かに、すべての種類の感覺に於て、外からの能動の傳達が歸着する終點、最後に觸發されるもの、が「唯一の中」であり、これに於て同類的感覺の識別も異類的感覺のそれも爲されるといふことである。

この引用のうちで、共通感覺が「最後のもの」と言はれてゐることと、それに於て異類的感覺が「類比的に又は數的に」(τῷ ἀναλόγῳ ἢ τῷ ἀριθμῷ) 一つなるものと言はれてゐることとは、吾々が言ひ殘した二つの事柄へ導く。

第一に、感覺に於ける最後のものとしての共通感覺は、前述の如くまた最初の(第一の)ものである。故にこゝには、感覺對象の能動が傳はる最後のものが、最初の(根源的なる)感能として、すべての現實的感覺に於て現勢化するといふ、アリストテレス哲學の全體を支配する圖式が現はれてゐるのである。實際アリストテレス自身も共通感覺を目的と呼んだ。彼は肉體の中心としての心臟を共通感覺の器官と考へたが、これに就て、それが營養的(植物的)なるまた感覺的(動物的)なる psyche の根源にして同時に最も主宰的なるものであり、目的 (telos) 達成の仕上げをなすものである、と語つてゐる(De iuv. etc. 3, 469a 4ff.)。然らばその目的とは何か。抑〻感覺をもつとは生きものの(動物τὸ ζῷον)の特性である。從つて動物の生きてゐること(τὸ ζῆν)は感覺の根源で

ある共通感覺の器官によるのでなければならぬ(ibid. 46g17)。然るにこの生命の積極的狀態は、缺如的狀態である睡眠に對して、目覺めてゐることである。故にこの「覺」(ἐγρήγορσις)卽ち少くとも感覺的意識が vital な生の目的でなければならぬ。而してこの覺が、感性的なる vitales Leben に關する限り共通感覺の現勢に外ならぬことは、彼が『睡眠と覺醒に就て』の論文の諸所に述べてゐるところである。[1)]

註(1)　曩に(本誌八月號四三頁)この論文から引用された個所をも參照。

第二。かく共通感能は感覺の領域に於ける最初にして最後のものである故に、屢、また「すべてのものに對する感能」(前出)とも言はれるのである。卽ちそれは特殊感能と違つて類を異にした感覺をも統一するのである。同じ類に屬するものを統一する視覺や聽覺等は、相互の間では異類的であるが、然も其等が等しく感覺と名付けられる限り、何等かの普遍者を共通にせねばならぬ。かく、類的相違を超えてなほ「名を等しくするもの」(ὁμωνύμος)が統一される時、その統一は analogon(類比)による一である。故にこれは外延的に最も廣い統一といはれ得る。併し乍ら、他面からいへばこの統一は、統一するものとして「唯一つの中」を豫想する。共通感能のこの唯一性は、この見地からすれば、最も個別的なる、內包的に最も具體的なる一である。かゝる唯一つの

統一力による多樣の統一が「數的なる一」である。[1] 故に、曩に、すべての感覺が共通感能に於て、「類比的に又は數的に一つである」といはれた時、それは、共通感覺が「すべてのものに對する感覺能力」であると同時にそれ自身としては唯一つのものである、といふ事を指示してゐるものと考へ得る。もしかく解し得るならば、その言葉は、曩に共通感能の二つの見地と名付けたもの、卽ちそれが特殊感覺をその根源に於て見たものであると同時にそれ自身としては唯一のものであるといふことを意味し、また、それが最初にして最後のものであるといふこと、卽ち凡ての感能(潜勢)の根源であり、また其等の凡ての現勢の統一であることを意味するであらう。故に共通感覺は、すべての感覺を自らよりの放射線として統一し乍ら感覺の全領域の中心となる。或は、一種の「一にして一切」として、感覺の世界に於ける具體的普遍ともいひ得るかも知れぬ。

註(1) 「數的なる一」に於ける他の側面に就ては後を見よ。——アリストテレスに於ては「一」は統一の外延性に從つて、數的なる一、種的なる(eidos による)一、類的なる一、類比的なる一、に分たれる(Stenzel の前掲論文參照)。內包性に從へば、位階は逆である。而して此の兩方向の交叉が、プラトンと同樣にアリストテレスの觀點と思はれる。例へば、實體が屢〻「一にして全體」といはれるのもこの兩方向の統一から見るからであらう(例へば Metaph. Z 7, H 2 等を見よ)。

もし共通感覺が感覺領域に於ける唯一の「中」であるとすれば、恰も特殊感覺の「中」に於て、相反する兩極(例へば白と黑)の間の種々なる比(logoi)として各〻の種(eidos)の感覺

(例へば或る色)が成り立つた如く、かの「中」に於ては、異なる類に屬するlogosとlogosとの間に比例(analogia)の關係が成り立つ筈である。この比例的關係による統一、類比的一を一層明かにするために、次の二つの個所を掲げやう。一つは曩に(八〇頁)引用されたDe animaの個所の續きである。「同類でないものを如何に識別するかと問ふことと、白と黑の如き反對のものを如何に識別するかと問ふことの間には、如何なる相異があらうか。(ない)。今、A(例へば白)がB(黑)に對する如く、CがDに對するとせよ〔A:B::C:D〕。換位の場合〔C:A::D:B〕も同樣である。ところでもしCとDを一つのもの(能力)に內屬するもの(例へば甘と苦)とすれば、兩者の間の關係はABの間の關係と同樣であり、卽ち同じ一つのものであつて然も各〻の存在性(τὸ εἶναι)は同じではないわけであるが、換位の場合〔CAとDB〕にもそれと同樣な事態が成り立つ。同じことはAが甘、Bが白であつても言はれる」(ibid. F 7, 431a24)[1]。故に、曩に視覺が潛勢的には白でも黑でもあるといはれ、また白と黑とが一つの能力に內屬すると考へられたと同樣に、例へば甘と白とも共通感能なる一つの能力に屬する。併し勿論、異類的なるものは、白と黑の如き同類的なるものが「混合」して種々なる色が生ずる如くには混合し得ない。この事を前提した上で、次の個所を見ればAnalogicの意味は明かであらう。

「例へば視覺と味覺とは彼等のうちの反對的兩極白と黑、甘と苦を夫々識別する仕方を異にする。併し同位的に對應するもの(τὰ στοιχεῖα)[2]を感覺する仕方は相互に同じである。例へば、味覺が甘を感覺するその樣に視覺は白を、後者が黑を感覺するその樣に前者は苦を感覺する」(De sensu 7, 447b29)。卽ち、夫々の內容に於て異り從つて感覺し識別する仕方に於てもそれを內容的に見る限りは異るところの五つの系列の感覺は、此等の諸系列の一方の極に位する感覺群(積極的狀態ἕξις)、他方の極に位する感覺群(缺如的狀態στέρησις)[3]及びその間に兩極の混合の同じ比(logoi)を以て成り立つ多くの感覺群を、いはゞ橫に通して(諸系列を橫切つて)見た場合には「同じ仕方で」感覺されるのである。而して、かく諸系列に於て同位的に對應するもの、換言すれば同じ比をなすものの統一が比例(analogia)による統一に外ならぬ。故に、例へば音の銳きもの・鈍きものと觸の其等との間の(De an. B 8, 420b1)また味と匂の甘きものと苦きものとの間の(ibid. B 9, 421a28)對應が、やゝ不明瞭な意義內容を以てではあるがanalogonとして語られてゐる。而して「嗅覺は味覺に對してanalogonをもち、また味の諸〻の種(εἴδη)が匂の其等に對應すると思はれる」と言はれてゐる時(ibid. 420a16)、analogonの意義は一層明瞭である。(何となれば、上來明かなる如く、こゝではeidosとlogosとは等義

であつて、唯logosは感能を秩序付ける「形相」の構造聯關に於ける契機の比的關係を意味し、この比の相異が感覺の「種」の相異なのであるから)。併し乍ら、曩にlogosがその本來の意義である有理數的比としてのみならず、最も廣義に、卽ち不通約なるものの比をも含めて考へられた如く、(4)ここでもanalogonはその本來の意義である同位的對應者間の比例のみならず、(曩の引用に於ける換位法に就ての言說が恐らく含意する如く)、すべて不對應なるものの間にも、從つて最も廣義に、考へられるであらう。かくして共通感覺は、各〻の特殊感覺の系列の兩極の間に成立つ比的關係のうちに於ても、又諸〻の系列を橫切つて成立つ比例的關係のうちに於ても、その「中」として其等を支へるものである。その意味に於て感性の領域に於てあるすべてのものが共通感覺の統一のうちにあると言ふことが出來る。

註(1)　こゝに於てもCDが何を代表するかに就て、又その他多くの事柄について古來解釋が區々である(詳しくはHicksの注釋を參照)。併し單に暫定的に止まるこの私解が正しくない場合でも、以下の行論にはさして差支へを及ぼさない筈である。

(2)(3)　此等の言葉の意義に立ち入ることは、實體論の課題である。(σύστασις に就ては Metaph. A. 5, 986b 23 に對する Ross の注釋を參照)。

(4)　本誌八月號三〇頁註三。

以上に於て、共通感覺が如何なる意味で感覺の全野を統一する唯一の中であるか

が大體明かにされたとすれば、曩に特殊感覺に於て感覺するもののlogosに對應して感覺されるもののlogosが考へられたと同樣に、こゝでも異類的なる感覺がAnalogieによつて數的に一なる能力へ統一されるのに對應して、感覺されるものの側にも同樣なる統一が見られるべき筈である。事實、類を異にした感覺されるもの、例へば白色と甘味とは、同一對象に統一され得る。或は同一實體の屬性たり得る。かくして此の叙述の冒頭にのべた感覺對象は、今や共通感覺の雙關者の意味をもつて來るのである。次の諸〻の個所はその事を示すものであらう。「諸〻の〔特殊〕感覺は互ひに他の感覺に固有なるものを隨伴的に感覺〔知覺〕する。尤も其等が諸〻の感覺である限りに於てではなくして一つの感覺である限りに於てである。この隨伴的知覺がなされるのは、膽汁が苦くて黃いのを感覺する場合の如く、感覺が同一物に於て二つの異つたものに對して同時に生ずる時である。一つの感覺であるといふ所以は、苦いと黃いとが一つであるといふことが、確かに他の〔特殊的〕諸感覺のいづれの働きでもないからである」(De an. Γ 1, 425ᵃ30)。この言葉は次の如く解してよいであらう。視覺はそれに對する黃色に於て、或る黃い「もの」例へば膽汁を知覺する。この對象は色と一つに、それに隨伴的に知覺されるものである。卽ちこの場合本來的に「καθ' αὑτό」[1]、modus

rectusに於て、感覺されるのは黄色であり、「もの」は黄色の感覺と一つに、黄い「もの」としてのみ感覺される。(この事は、言ふ迄もなく、既述の如く或る特殊感覺の根源がその感覺の根源としてのみ働くといふことと相應するのである)。扨てこの對象知覺と共に、それを通して對象の他の諸性質例へば苦味も隨伴的に知覺される。味覺に黄色の感覺が附隨する場合も同樣である。併しかゝる事が起り得るためには視覺や味覺が視覺や味覺として働くのみではなくして、其等に共通なる根源的感能が働くのでなければならぬ。この働きに於て兩感覺は、夫々他に固有なるものを隨伴的に知覺し乍ら、一つの感覺となる。故にこの感覺の「一」は數的に一なる共通感覺によるAnalogieの「一」であり、それに對應する數的に一なる物に於ける黄色と苦味の「一」も同樣である。この事は次の個所にも現はれてゐる。「對象自身に於てと同じ事情がpsycheに於てもある。何となれば、同じのそして數的に一つのものが白くまた甘くあり、その他多くである――もしも、此等の性質が相互に離れ離れなのではなくして、その各〻が各〻としてあること(τὸ εἶναι)が別なのであるとすれば。そこで、同樣にpsycheに於ても、すべてのものへの感能(共通感能)は同じのそして數的に一つのものであり、然もτῷ εἶναιには別々である。即ち或るもの(白と甘の如き)に對しては類的に、或るも

の(白と黒の如き)に對しては種的に別々である。かくしてまた同じ一つの能力によつて同時に感覺がなされる、が τῷ λόγῳ に於ては同じ能力によつてではない」(De sensu 7, 449ᵃ13)。かく對象の側から感覺の多樣を統一する數的一と、psych(感能)の側から同じ感覺の多樣を統一する數的一との雙關性は、カントに於ける統覺の統一とその雙關者としての所謂先驗的對象との關係が、その統覺を(カントとは異つて)內感の「經驗的統覺」とした場合に持つであらう如きものである。[2]

註 (1) 本誌八月號一六頁參照。

(2) 共通感覺とカントの內感とは、それ以外に、自己自身の意識であること、時間性の能力であること等に於ても類似してゐる。併し、兩者の相違も、特に構想や記憶の領域に於ける共通感能の役割を勘定に入れるならば、同じ程度に著しい。この事は、共通感覺がプラトンに於ける感性と悟性の關係の困難に克たんがための意味をもつと思はれるに反して、カントは寧ろプラトン的立場に立ち、然も矢張內感の(殊にその「經驗的統覺」の)意義、內感と構想力との關係等に不明瞭を殘してゐるからではないであらうか。カントが、內感の經驗的統覺について「內的知覺に於ける吾々の狀態の諸規定に從つての自己自身の意識は單に經驗的で、恒に變易的である、內的現象のこの流のうちには立ち或は止る如何なる自己あり得ない。……必然的に numerisch identisch として表象さるべきものは、かゝるものとしては經驗的所與によつて思惟されることは出來ない」といひ、先驗的統覺に、numerische Einheit "(然もカントの意味に於て「必然的」なる)を認めてゐるのも(K. d. r. V., A. S. 107)、單に本來の認識能力とその雙關者にのみならず、既に共通感能とその雙關者にも數的一を歸するアリストテレスに對して、立場のかの類型的差異を示すものではないであらうか。

八

共通感能がそれ自身としては唯一の感覺能力であり乍ら、同時に他面諸〻の特殊感能に分肢化されてゐるものであり、從つて特殊感能の根源であると共にまた其等の各〻を各〻の根源に於て見たものであるとすれば、それはいはゞ感覺に於ける「作用の作用」の能力ともいはれ得るであらう。而してここから、それの他の諸機能も理解出來る。共通感能の機能としてアリストテレスが考へたものは、今迄述べて來た感覺の識別や比較の働きの外に、感覺作用の意識、及び、運動・靜止・形・大さ・數・一等の如き所謂「共通的に感覺されるもの」の感覺である。

感覺に於ける「作用の意識」が作用の作用としてこの共通感覺によつて成り立つと考へられたことは、例へば『睡眠と覺醒に就て』のうちで次の如く言はれてゐることから見ることが出來るやうに思はれる。「各〻の感覺には或る固有的なるものと或る共通的なるものとが內屬する。固有的とは視覺にとつては視ること、聽覺にとつては聽くこと等であるが、更に或る共通的能力にしてすべての特殊感覺に伴ふものがある。そしてその能力によつて人は自分が視る又は聽くといふことを感覺する。何となれば、視ることを視るのは眼によつてゞはないから」(De somno etc. 2, 455^{a}13)。然るに De anima のうちには之と一見矛盾する如きことが言はれてゐるのである。

「吾々は吾々が視また聴くことの感性的意識をもつとすれば、視ることを感覺(知覺)するのは視覺によつてか、もしくはそれと別の感覺によつてでなければならぬ。併し(いづれにせよ)視ることを知覺するその感覺は、視覺とその對象卽ち色との感覺であらう。故に(かの擇一を言ひ換へれば)同じもの(色)に對して二つの感覺があるか、もしくは同じ感覺(視覺)がそれ自身を知覺するかである。(前者は不合理なる故後者である)。更にまた、もし視覺の知覺が別の感覺であるならば、(後者を知覺する更に別の感覺が考へられて)限りなき系列を進むかもしくはその系列のうちの或る感覺が自らを知覺するかである。故に(後の場合が正しいとすれば)系列の最初の感覺に於てそれが爲されねばならぬ。併し乍ら、こゝに一つの困難がある。視覺によつて感覺することが視ることであり、視られるものが色又は色をもつものであるとすれば視るものを視覺する時、最初の視るもの(內的知覺で視られるもの)は色をもつ筈である。それ故、明かに、視覺で感覺するとは、一つのことではない」(ibid. Γ 2, 425b 12ff.)。こゝでは、視覺を知覺するものも視覺であり、別の、第六感ともいふべき感覺ではない、といふことが明瞭に語られてゐる。併し曩の言葉とのこの外見上の矛盾に對する解明は、今の引用の最後に、視覺による感覺とは單純なものではないといはれてゐることに既

に與へられてゐる。第一次的なる、感官と直接に一つである限りの、視覺は、嘗て述べた如く、感官の質料的なるものが、對象から受取られた形相のlogosによつて秩序付けられ或る意味で色付けられる限り、色をもつと言はれ得る。併し內的知覺は、視覺を視る限りに於ては、色をもつとは言はれない。その意味でそれは第一次的視覺とは概念上區別されて、共通感覺と呼ばるべきである。而してそれが別の感覺ではないと言はれるのは、それが諸〻の特殊感覺から獨立分離してそれだけであるのではないといふ意味であるべきである。卽ち曩に、共通感覺は實際に於ては恒に特殊感能を通して、又はそれと一つにのみ働くと言つたことに外ならぬ。のみならず、感覺作用の意識を共通感覺に歸してゐる前引De somnoの個所も、仔細に見れば既に同じことを言つてゐるのである。卽ち、「各〻の感覺には（καθ' ἑκάστην αἴσθησιν）或る固有的なるものと共通的なるものとが內屬する」といふのである。

併し乍ら、共通感覺が特殊感覺と一つにのみ働き、その結果、如何に視覺で感覺することが一つではないとしても、共通感覺が兎も角「視覺で感覺する」（τῇ ὄψει αἰσθάνεσθαι）と言はれてゐることは、尙進んで吟味されることを必要とする。卽ち、共通感覺と特殊感覺が一つに働くといふことその事の構造が問題である。吾々は曩に、特殊感能

が一面に於ては肉體の一部分である感官の能力として、感官と一つのものであり、感官と感覺對象との間の質料的過程と一つに編み合はされ、かくして對象的なるもの例へば色及び色をもつもの)の感覺(知覺)を可能ならしめると同時に、他面に於ては肉體の形相である psyche の一能力として psyche の一部分であり、かの質料的過程へ解消されることなくして寧ろ感官をして對象の形相を質料なしに受取ることを得しめ、かくして對象的なるものを感覺することを可能ならしめるのであると言つた(八月號三五頁)。かくの如く、感能がいはば相反する兩方向に繫つて媒介となることによつて、psycheが對象的なるものを感覺し得るのであり、またかくの如く肉體と psyche とが dynamis に於て一つに統一されてあるものが、一個の具體的なる「生きもの」なのである。(故にアリストテレスも屢〻いふ如く、生きものの肉體でもそれが死んだ後は肉體とは言はれない)。ところで、もし前述の如く、共通感能を感覺する限りの psyche の、psyche としての能力と言ひ得るならば、特殊感能が psyche の能力として見られる限りに於ては、それと共通感能とは、psyche のその都度々々の働きに於て、或は視覺と呼ばれ或は聽覺と呼ばれる如き一つのものである。何となれば、兩者の一つである事のみが、感覺を成り立たせるのであつたから。而してその限りまた、特殊感覺の作用

を知覺するものも、その感覺の名を以て呼ばれ得る筈である。併し反對に、特殊感能が感官の能力として見られる限りに於ては、感覺する psyche は、從つて又その能力としての共通感能も、それ自身に於て見られる事が出來る。この見地からすれば、特殊感覺の作用の知覺は(共通感能と特殊感能の內面的繫りは飽くまでも有るのであるから)、psyche の自己意識、その Befindlichkeit の意味をもたねばならぬ。いはゞ psyche が直接に自らに觸れ、自らの存在の直接的意識をもち、またかく意識するものとして有ることである。かくして、感覺作用の意識は、特殊感能と感覺する限りの psyche 一般とが一つであるといふことを特殊感能の見地から見るか感覺する psyche 一般の見地から見るかによつて、或る意味で視覺聽覺等の名を以て呼ばれ得る如き意義と自己意識としての意義とをもつ。感覺作用の意識とは、具體的には、それに於てこの二つの意義が同時に成立つ如きものでなければならぬ。――のみならず、感覺作用の意識が前の意義(卽ち特殊感覺の名を以て呼ばれ得る如き意義)をもち得るのは、特殊感能が感覺する限りの psyche 一般の能力卽ち共通感能と不可分的に一つであり、從つて各〻の感覺のうちに固有的なるものと共通的なるものとが內屬し、前者は例へば視る事であり後者は視ることを知覺する事であるからであつた。かく、各〻の感覺に不

可分的に兩者が內屬し、然も、上に述べた如く、各〻の感覺が對象的なるものを感覺するのは、特殊感能と共通感能とが一つであることによつてであるとすれば、明かに、特殊感能の働きは恒に何等かの意味でそれの作用の意識を伴ひ、視ることは恒に或る意味で視ることの知覺を含んでのみ成り立つのでなければならぬ。眼による外的知覺は同時に、それと一つに、それの知覺をも惹き起し、この內的知覺を地盤としてのみ成り立つと考へ得る。內的知覺は、それが例へば視覺と呼ばれ得るといふ見地に於ては、第一次的なる視覺と一つの構造聯關をなし、その視覺に基いて成立つと同時に、それを基づけ成り立たしめるものである。――この事と曩の自己意識としての內的知覺の意義とを更に總括して全體的に見れば、對象的なるものを感覺するといふ時、恒にそれと一つに、その感覺作用の意識と感覺するpsycheのBefindlichkeitとが成り立つのでなければならぬ。作用意識とBefindlichkeitとが感覺活動のうちに惹き起されることは勿論であるが、逆に、感覺することも其等に裏付けられて初めてあり得るのである。三者は、感覺の運動の契機としての感官と特殊感能と共通感能との間の上來述べて來た如き卽かずまた離れざる生きた繫りによつて、一つの感覺活動の構造聯關をなすと言ひ得る。感覺が、dynamisを媒介として肉體とpsycheとが一つに統一され

てゐる一個の生きもの(動物)の働きである所以である。而して感覺するとは、感覺されるもののlogosをlogosとして受取ることのうちに感覺するもののlogsが內から實現されて來ることであるとすれば、このことと同時に、一方では感覺に於けるかの統覺能力によつてその雙關者たる對象が隨伴的に知覺されると共に、他方に於ては知覺するものの存在意識又はBefindlichkeitが成り立たねばならぬ。この全體が感覺することのうちに構造的に含まれてゐることであり、かくして曩に語られた感覺の認識性の構造は今やこの一層廣い地平によつて補完されねばならぬのである。

以上述べられたことを例證するために、一二の個所を擧げやう。先づ『夢に就て』のうちでは、「諸〻の感官から運動が根源へ向つて動き至ることによつて、目醒めてゐる時でも人は自分が視聽き、一般に感覺すると思ふ」といはれてゐる(De somniis, 461ᵃ, 30)。こゝに根源(ἀρχή)といはれてゐるものは言ふ迄もなく共通感能であり「感覺すると思ふ」(δοκεῖ αἰσθάνεσθαι)といふ、こゝで屢〻(特に夢に就て)用ひられてゐる言ひ方は、この共通感能による感覺作用の意識が直ちにBefindlichkeitであるのでなければ、言はれ得ない筈である。同じことは一層明瞭に『ニコマキア倫理學』I 9の一節(1170ᵃ13—ᵇ19)に現はれてゐる。この節の主題は、有德なる人間が自然的に他の有德なる人間を冀

1)

ふといふことであり、行論の出發點は、自然的によいものは有德なる人間にとつてはそれ自身に於てよくまた快いものであるが、生命こそかゝるものであるといふことであり、その結論は、有德なる人間が自らの存在を善きものとして知覺するその同じ存在意識のうちに、同時に友人の存在が共に知覺されねばならぬといふことである。而して、作用の意識はこの結論への通路として說かれてゐる。今の吾々の問題に必要である限りを大略引用すれば次の如くである。「もつと自然的に探究するならば(φυσικώτερον δ' ἐπισκοποῦσιν)、有德なる友人は有德なる者にとつて、自然的に、願はしきものであると思はれる。[2] 何となれば、自然的に善きものはそれ自身に於て、有德なる者にとつてよくまた快きものであるから。[3] 扨て、生きることは動物に於ては感覺の能力によつて、人間に於ては感覺とか思惟とかの能力によつて定義され、能力は働き(現勢)に歸せられ、働きが特長的なるものであり、かくして生きることは、特長的には感覺することとか思惟することとかであると思はれる。然るに、生きることはそれ自身に於てよく又快きものに數へられる。……そして自然的によきものは合宜なる人間にとつてもさうである。……併し、生きることそれ自身がよく又快いとすれば、……そして、視る者が視ることを、聽く者が聽くことを、歩く者が歩くことを知覺し、そして他

の場合に於ても同樣に吾々が働くことを知覺するものがあり、かくして吾々は吾々が感覺することを感覺し思惟することを思惟するとすれば、また、もし吾々が感覺・思惟することを感覺・思惟することが、吾々が在在することを感覺・思惟することであるとすれば、(何となれば、存在するとは感覺する又は思惟することであつたから)、また、生きてゐることを感覺するのはそれ自身に於て快きものの一つであるとすれば、(何となれば生命は、自然的に、よきものであり、そして自らのうちに內屬するよきものを感覺するのは快いことであるから)、また、生きることが願はしきものであり、善き人々にとつて特にさうであるとすれば、……また、有德なる者は友に對すること恰も自己自身に對する如くであるとすれば(何となれば友は他の自己であるから)その時は、各人にとつて彼自身の存在が願はしい樣に、友の存在も同樣又は殆んど同樣である。然るに存在は、彼自身が善であることの知覺によつて願はしきものであつた。然もかかる知覺は自體に於て快きものである。故に、彼は友が存在することを(かの自己知覺と)共に知覺する(συναισθάνεσθαι)[3]を要する。然るにこの事は共に生きそして言葉や思考を交はすこと(τὸ συζῆν καὶ κοινωνεῖν λόγων καὶ διανοίας)のうちに生ずるであらう。何となれば、人間に於ては共に生きるとはかゝる意味であり、畜群に於ての如く同じ

所で食餌をとることではないと思はれるから」。この一節の主旨は、生きることがその自然的本性に於てよくまた快く、從つてまた願はしきものであり、然も生のこの本來的意義が發揮され得るのは有德なる者に於てのみであり、有德なる者は自己の存在の知覺に於て同時に友の存在の知覺をもつを要するといふことであるが、今の吾々の問題にとつて肝要なのは、人間の生が感覺や思惟の現勢であること、從つて感覺作用の知覺は自己の存在の知覺であること、然もこの Befindlichkeit はそれに伴ふ *συναισθάνεσθαι* に於て社會性を含んでゐることである。かくして吾々は人間に於ては感覺作用の知覺すらが共同社會の自然的—發生的根據であり、逆にまた共同社會がかの知覺の構造的基底であると推定し得るやうに思はれる。

註 (1) アリストテレスによれば、目醒めてゐることのみならず眠や夢も共通感能の狀態である。

(2) 假りに「有德なる」と譯した *σπουδαῖος*—アリストテレス倫理學の主要概念の一つ—の意義は後に述べる。

(3) アリストテレスに於て稀にしか現れないこの *συναισθάνεσθαι* (1170b 10)は Grant, Stewart によつて 'sympathetic consciousness' of his friend's existence の意味とされる。(後者の Notes on the N. E. vol. II, p. 393 を參照)。b4 に現はれてゐる場合をも併せて考へれば、この *συν*—は元來は、或る *αἰσθάνεσθαι* のうちの第一次的契機乃至意義に附け加はつてその知覺の具體的全體を形成する如き、ergänzend な知覺、いはば知覺の modus rectus に對する modus obliquus を意味するのではないであらうか。實際 Alexander は、第一次的感覺に同伴して來るものといふ意味で感覺作用の知覺を恒に *συναισθάνεσθαι* を以て言ひ表した(Hicks, De anima p. 434 參照)。

以上は感覺作用の意識の概說である。次に、共通的に感覺されるもの（τὰ κοινὰ αἰσθητά）卽ち運動・靜止・大さ・形・數等に就ては、其等の一々に立ち入ることを避けて、この小論の意圖に關係ある諸點のみに觸れやう。第一に問題となるのは、其等が各特殊感覺に固有的に感覺されるもの（τὰ ἴδια）と共に、自體に於て感覺されるもののうちに數へられて、隨伴的に感覺されるところの對象物に對立せしめられ乍ら（De an. B 6）、然も同時に他方では、特殊感覺に固有なるものに對して、更に區別されて隨伴的に感覺されるものと言はれてゐることである（ibid. Γ 1, 425ᵃ15）。例へば、或るものの白い色とその形は自體に於て知覺されるものであるが、そのものが例へばディアレスの息子であることは、（知覺としては）恒に前者に隨伴してのみ知覺される。然も更に形と色との間では、前者は單に後者に隨伴的に知覺されるのみである。この事は勿論矛盾ではない。何となれば、共通的なるものが自體的に感覺されるものであるのは、特殊感能と共通感能とを一つのものとして見た知覺一般の立場から見て言はれるのであり、それが隨伴的に感覺されるものであるのは、單に特殊感能だけの立場から見て言はれるのであるから。併し乍ら兎に角、共通的なるものと對象物とは夫々の意味に於て隨伴的に知覺されるものである。而してそこから、第二の問題として、其等に

於ける誤謬の可能の事實が生起する。「諸〻の固有的なるものの感覺は眞であり或は僞の極小しか含まない。次に、其等が隨伴するといふことの知覺が來る。そして、これに於ては既に僞に陷ることがあり得る。何となれば、白いといふことに關しては僞にはなり得ないが、白いものが甲であるか乙であるかに關しては僞になり得るから。[1] 第三に、諸〻の共通的なるもの、そして固有的なるものが內屬する所の隨伴的なるもの(卽ち對象物)に從ふ如きもの、の知覺が來る。……感覺されるものに關して誤ることの最も多いのは此等に就てである」(ibid. Γ 3, 428b18)。例へば或る色が視られ又それと他の色とが識別される場合には誤謬はあり得ないが、三日月を視る限りに於ては、月の大さや形に就て、[2] また朽繩を蛇と視る場合には物自身に就て、誤謬が犯されるのである。先づこの後の場合に就ていへば、それは曩に共通感能による異類的なるものの類比的統一に就て語つたことから說明され得る。例へば膽汁が黃くて苦いといふ知覺は、視覺が黃色の感覺に於て黃い「或るもの」卽ち膽汁の知覺を通して隨伴的に苦味を知覺し、味覺が苦味の感覺に於て苦い「もの」としての膽汁の知覺を通して隨伴的に黃色を知覺することによつて、共通感能の立場から一つの感覺となることを意味した。そこからして、或るものが黃色である時、誤つてそれが膽汁であると考

へることもあり得るのである(De an. Γ 5, 425b3)。卽ち、共通感能の立場に於て爲される如き、他の種類の感覺によつての檢證を俟たずに、一つの感覺による物の知覺に止る場合に於てである。次に、共通的に感覺されるものに於ても、それが自體に於て感覺されるものである限り、卽ちそれの感覺が(曩に述べた所によれば)特殊感能と共通感能とが一つである見地から語られる限り、誤謬はない、例へば鎌形も單にかゝる形として視られる儘で眞である。併し、それが隨伴的に感覺されるものである限り、卽ちそれの感覺が單に特殊感覺のみの見地から語られる限り、それが、どの見地からも恒に隨伴的にのみ知覺される所の對象物と一つに知覺されることとなる故に、[2]そこには、誤謬があり得る。例へば鎌形が、單にかゝるものとしてではなくて、月なる對象物の形として視られる如きである。併し、感性に於ける誤謬に關しての充分なる理解は、構想や記憶に現はれる共通感覺の新らしい意義の述說を俟つて初めて可能である。

註(1) 同じことは De an. B 6, 418a15 にも言はれてゐる。

(2) 曩の De an. Γ 3, 428b18 以下の引用のうちで、共通的なるものが、「固有的なるものが內屬する所の隨伴的なるもの(卽ち對象物)に從ふ如きもの」と呼ばれたのは、この見地からであらう。

九

アリストテレスの感性論を概括して見出されるその特色は、感覺が單なる物質的過程には盡きざる一つの生命現象であり、然も生命現象のうちでも營養の如く單に物質的過程に卽したものではなくして、それから一歩の距離を保つて既に認識の意義を含むものと考へられてゐることである。アリストテレスによれば、植物まで下つてもなほ見出されるところの營養現象すらが、最早單なる物質的過程ではない。彼は彼以前の二つの考へ方、卽ちエムペドクレス等によつて代表される「等しいものが等しいものから動かされる」といふ考へ方と、アナキサゴラス等によつて代表される「等しくないものが等しくないものから動かされる」といふ考へ方を綜合して、食物は、外から攝られた限りに於ては、肉體に對して、等しくないものが等しくないものに對する如く働きかけ、それが消化された後は、等しいものが等しいものに對する如く働きかけると考へた。卽ち營養過程も質的變化の一つである。然るにかゝる變化すら既に單なる物質的過程ではあり得ず、質料に對する形相としてそれと直接に編み合された psyche(生命)の活動性がかの關係の意味の轉換に動力となるのでなければならぬ。感覺も同樣に質的變化の運動である。それに於ても感覺するものとさ

れるものとの關係が、運動の初めと終りとに於て營養の場合と同樣なる意味の轉換を經ねばならぬことは、既述の通りである。のみならず、感覺に於ては、營養に於て食物が形相と質料との未分のまゝで働きかけ受取られるに反して、感覺對象が質料なしに形相のみとして受取られる。故に營養の場合と異つて、感覺對象それ自身は如何に度々感覺されても、それによつて變ることはないのである。對象からの此の距離は、他面に於ては、感覺するものが對象への全き編み合せから一歩遊離して、いはばより自由となり能動的となることを意味する。かくの如き距離的關係に於て初めて、感覺の認識性も可能となるのである。即ち、對象の形相又はロゴスがロゴスとして受取られることのうちに感覺的 psyche のロゴスが內から實現され、それと共に對象が隨伴的に知覺されると同時に知覺するものの自己意識が即ちその Befindlichkeit が成り立つ、といふ構造が展開され得るのである。而して曩の引用(七五頁)に於て、共通感能が類を異にした感覺內容を「相異ると考へまた感ずる」といはれた時、かゝる感覺の認識性が表示されてゐるのであり、また「相異ると今言ひそして今相異ると言ふ」といはれた時、かゝるロゴスの實現が意味されてゐると考へることが出來る。何となれば、この「言ふ」(λέγειν)はこの場合勿論文字通りに解せられることは不可能であり、

寧ろ、感覺することのうちに psyche の內面より logos が實現して來ることを含意するものとして、卽ち、感覺の作用性そのもののうちに於ける、純粹に所謂「ノエシス的」なる logos を、從つて結局感覺の認識性を、示唆するものとして解さるべきである。かくして、感覺は、植物に於ける如き單なる生命ではなくして認識への萌芽を含む生命である。動物に於ては感覺することがその生であると曩に言はれたのもこの故に外ならぬ。勿論、感覺にあつては、感覺されるものは個々の與へられたものに止まる。形相を質料なしに受取るといつても、感覺されるものはその形相をもつもの、例へば個々の色及び色あるものである。物の普遍的なる「何」(τί) 或は實體ではなくして、個別的に制約された「斯く斯く」(τοιόνδε) を——たとへ λόγος に關してではあるが——捉へるのみである(八月號三四頁參照)。色ある「もの」の知覺が色のそれに隨伴的に爲されるとしても、それは τί としてではなくして τοιόνδε を通してそれと直接に一つに見られる限りに於てであり、今此處に與へられた限りの此のもの(τόδε τι)にすぎない。[1] 本來の認識がさうであるやうに、今此處に與へられた此のものを通して、その個別的制約卽ち τοιόνδε を排除したる普遍的 τί が見られ、更にこの普遍が判斷に於て再び τοιόνδε に結びつけられて生ずる如き、τόδε τι の認識ではない。併し乍ら兎に角、感性知覺が物の

τοιόνδε をその λόγος に關して(卽ち質料なしに)受取り、それを識別比較し、また假令隨伴的にせよ物の知覺であると同時に知覺するもののBefindlichkeit であることに於て、本來への認識に發展すべき方向を含み、普遍的なるものを潛勢的に包藏するものと言はれることが出來る。[2]

註 (1) Analytica Posteriora, A 31 を參照。
(2) ibid. B 19 100a 1 以下特に a17 を見よ。

かくしてアリストテレスは、感覺的所與の多樣を綜合統一する統覺能力を感覺自身の領域の外にのみ求めることに滿足せずして、感性そのもののうちにその力の萌芽を認め得るとする。感覺されるものの間の識別比較もこの統覺力によつて爲されるのである。この力は窮極的には、共通感覺に於ける綜合統一の原理としての「唯一の中」をなし、この綜合統一する中は識別比較の原理としての「分別する中」(τὸ μέσον κριτικόν)である(八月號五〇頁)。この考によつてアリストテレスは悟性の特性をいはば感性のうちへまで引き降したのであるが、この事は勿論彼が感性と悟性又は理性との本質的區別を無視したことを意味しない。それは彼が動物と人間との有り方の本質的差異を繰返して語つてゐる事からも明かである。唯彼は感性と悟性との

關係のうちに、分離と非連續と同時に生命的連續をも認めんと欲したのである。共通感能を知らなかつたプラトンは感覺に綜合統一の力を拒み、學的認識の可能の基礎をただ理性の働きのうちにのみ求めたために、感性と理性との結合に關して困難に陷るを免れなかつた。アリストテレスのかの考はこの困難に打克たんとする一つの試みに外ならぬ。而して、もしも感覺に於ける綜合統一から經驗へ、更に經驗から學知へ至る生きた發展が、從つてまた、(發展に於ける下の段階は上の段階の展開に於ても恒に基底として殘る故に)感覺と學知との生きた結合が、事象そのものへ赴く「自然的研究」にとつて否定すべからざる事實であるとすれば、このアリストテレスの思想は、單に感覺の問題に對してのみならず、認識の、また哲學の、問題に對して看過すべからざる意義をもつであらう。

併し乍ら、共通感覺は單に感覺の綜合統一や識別比較にのみならず、また構想や記憶にも働く。共通感覺のこの新しき役割は構想論の問題である。(完)